

年間わずか100頭、鳥取の大山で生まれた“幻の豚”

# 東洋のイベリコ ととりこ豚

TOTORIKO TON



平成22年からは「黒豚」(登録豚)となり、ととりこ豚は更に進化している。

## ととりこ豚とは？

鳥取県西部、霊峰大山(だいせん)の麓で育てられる、ととりこ豚。ちなみに「ととり」とはハングルで「どんぐり」の意味で、どんぐりの語源はハングルとも言われている。「ととりこ豚」は県内産のどんぐり、米、大豆を食して育ち、その比率たるや5割以上で、これは他に類を見ず、現在地産どんぐりで給餌されている豚は「ととりこ豚」だけである。

## 最高の肉質の秘密

どんぐりを食べることで、香り豊かで上質の肉質は健康面でも注目を集めるオリーブオイルと同様のオレイン酸を多く含んでおり、非常にみずみずしくとろける食感。

この豚を育てる金平牧場は、鳥取県畜産共進会「肉畜の部」でグランドチャンピオンを受賞するほどの豚育成のスペシャリストで、一頭一頭の体調を見ながら一日一回の給餌で肥育している。この「制限給餌」は全国でも珍しい。

## 特別飼育での希少性

制限給餌などの特別な飼育方法のため、年間で生産される頭数はわずか100頭あまりで、県内外のホテル・レストラン・ゴルフ場などと契約を結んでいる。

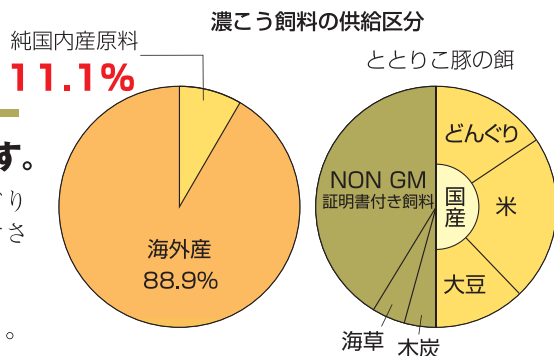
## どんぐり+お米 = おいしい



### ととりこ豚は自然との共生も目指しています。

ととりこ豚が食べているどんぐりは、里山のどんぐりではなく、動植物の生態系保護の観点から、人工植樹されたもの。

独自のネットワークを利用して取捨している。このような地域を巻き込んだ活動も注目を集めている。



### どんぐりも、米も大豆も地元産。

個人の農家では、数少ない自家配合。この米と大豆も地元の契約農家で栽培しており、餌のトレーサビリティまでも把握できる状態にある。



豚の飼育を行う金平さん



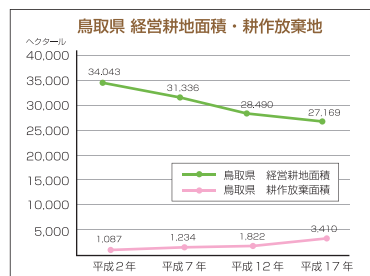
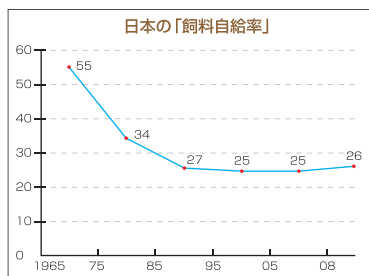
飼料米や大豆を育てる井田さん

## 飼料米は日本を救う？

日本の飼料自給率向上に役立ちます。水田の荒廃を防ぐのに役立ちます。

畜産類の飼料の多くを輸入に依存しているため、それに代わる飼料用米は国内飼料の自給率向上に役立ちます。

農村の高齢化、水田の生産調整で年々、荒れた耕作放棄地が増え続けています。飼料用米が増えることは水田を中心とする日本の美しい農村の風景を守ることに繋がります。



地域の中でリサイクルをすすめます。

地元で育った飼料用米を、地元の畜産農家が利用することで永続的な循環の環が作られます。

